

■2004.1.31 フォーラム報告■

特集:これからの国際理解教育を提案する!

ーグローバル教育と多文化共生教育をつなぐー



「外国人」を親に持つ子どもの数はこの10年で倍増しており、学校では、日本語指導を必要とする子どもたちのために「国際教室」を設置する等の取り組みを行っています。しかし、そうした取り組みと、「日本人」の子どもたちが世界や地域を理解してゆくための「グローバル教育」「国際理解教育」は、多くの場合、分離された形で展開されていないでしょうか。

神奈川県国際交流協会は、地域で学び育つすべての子どもたちが、地域と世界の成り立ちを理解し、互いを理解し合い、ともに生きるための実践の可能性について考えることを目的に、2004年1月31日、フォーラム「これからの国際理解教育を提案する!」(第1部ワークショップ、第2部パネルディスカッション)を開催しました。

当日は、130名を超える教育関係者、NGO関係者、学生等の方の参加があり、テーマに対する関心の高さが伝わってきました。

今回の特集では、同時開催された教材・教具展の様子を含め、フォーラム当日の概要をご報告します。(フォーラムの詳細は、後日発行予定の「報告書」をお読みください。)

■第1部■ワークショップ

博物館を活用した国際理解教育
ー「移民」をキーワードに

●講師:中山京子さん

(東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校教諭)

博物館と連携した授業経験の豊富な中山さんが、「移民」を切り口とした国際理解の授業を紹介した。日本には、「海を越えて国際社会に羽ばたいて行った『移民』の歴史がある。現在は、南米から日系2世、3世が来日し定住化が進んでいる。『移民』という人々の存在やその歴史的経験を探っていくことは、グローバル化と内なる国際化をつなぐ部分を持っていて、私たちが学びきっかけをたくさん秘めている」と中山さん。低年齢の子どもが「移民」を共感的に理解するための工夫として、「紙芝居づくり」と「カルタづくり」の紹介があった。

紙芝居



■中山さんが全米日系人博物館の巡回展示「弁当からミックスプレートへ」の日本巡回のときに考案した紙芝居(全10枚)。紙芝居は指導者の思いを絵や言葉でわかりやすく表現でき、子どもから大人までを引きつける。また、子どもたちだけで読み上げられるので、子どもたちだけの自由な学習空間をつくることもできる。

カルタ



■紙芝居同様、指導者が介在しなくても「学び」をつくれるカルタ。読み札の言葉、絵札の映像から子どもたちの中に印象的に何かが残っていく。子どもと一緒にカルタをつくることもできる。カルタを作成するために、何かを自分から知りたいと思ったり、調べようという思いも生まれる。自分たちでつくったカルタで遊ぶのもまた格別だ。



参加者も実際に「ブラジル移民」をテーマにカルタを作成した。130人の参加者で、部屋は鮎詰め状態。それでも、カルタづくりの時間が始まると、移住の写真集や資料を前に、あちこちで参加者同士の情報交換が始まり、短時間にどんどんカルタがつくられていった。主体的に参加する時間の大切さを感じるひとときだった。(◀ 作品はこちら)

■第2部■パネルディスカッション

「グローバル教育と
多文化共生教育をつなぐ」
コーディネーター●森茂雄さん
(中央大学文学部教授)

協会では、2003年7月から大学教員、学校教員、教育委員会、NGO関係者を構成メンバーとする研究会(座長:中央大学文学部教授森茂雄さん、右写真)を設置し、「グローバル教育と多文化共生教育のインターフェイス」を研究テーマに、外国籍児童生徒への取り組みと一般教室での「国際理解教室」をつなぐ事例等を収集しながら、調査研究に取り組んできました(中津さん以外のパネリストは研究会のメンバー)。パネルディスカッションでは、研究会の成果を発表し、参加者の方々と意見交換を行いました。以下、パネリストの発言の一部をご紹介します。



子どもの思考からみる 多文化教育と国際理解教育の インターフェイスを考える

中山京子さん
(東京学芸大学教育学部
附属世田谷小学校教諭)



子どもの自由な発想からテーマを設定し、地域のリソースを発見・活用し、演劇を通して学習成果を発表した小学校4年生の総合学習「ワールドカルチャー」の事例を紹介。



◆(総合学習を始めた)この時は、日韓ワールドカップで盛り上がっていました。「韓国って格好いい!」と単純に思った子どもが、韓国の衣装や音楽をやりたいと調べていくうちに、「楽器を借りたい」と韓国大使館に相談したのですが対応できないとのこと、どうしようかと考えた、子どもたちはインターネットで調べて、「コリアンタウンがあるぞ」「朝鮮・韓国の子どもの学校があるぞ」とやっと気がつくのです。そうすると、子どもたちはすごく純粋で柔軟性があるので、「楽器貸して」って門を叩くのです。そして、初めてその世界を垣間見て帰ってくる。サッカーを通して「韓国」に興味を持った子どもたち

の視点が、だんだん身近な世界に迫ってきて、「自分の隣にはそういう人々が住んでるじゃないか」「どういことだ?」と関心を持てるようになってきます。外からの興味が内側へ向いてくるのです。

◆そんな風に子どもの思考というのは動く、自由自在に学問の枠を飛び越えて行く、インターフェイスというものが本当に自然に起こるのだと思いました。教材からそういうものを導いていく手法もあるけれど、子どもの内在するものを表に出していくのもひとつのやり方だ、そんなことを考えた実践でした。(詳しくは、Hello Friends No.225参照)

教室の国際化と インターフェイス

宇土泰寛さん
(東京都港区立
三光小学校主幹)



宇土さんのこれまでの教育実践の経験を「グローバル教育」と「多文化共生教育」のインターフェイスという視点から分析した。中でも、大田区の小学校において、30人の外国籍児童の取り出し学級を「地球子供教室」と

名付け、学生ボランティアなど市民の参加を得ながら、多文化共生の空間をつくり、それが学校改革につながっていった事例を紹介した。



◆(国際教室の担当教員になったとき)日本語教室でもよかったんですけど、やはりいろんな視点を考えたときに、子どもたちに「～ができない子どもたちが行く空間」という裏のメッセージを与えたくないということもあったし、日本の子も、外国の子も、同じ地球の仲間であり、とにかく一緒に来て、いろんな活動ができる場という意味で「地球子供教室」というのを作ったんです。

◆外国の子どもが、「地球子供教室」で日本語を学んでいるときは、非常に情緒的に安定して笑顔でいるのに、所属学級に帰ると、だまって座り込んで1時間授業を受けている。それで、私としては、道德の時間等を利用して「一般学級」に入って、国際教育プログラムを担任と協力しながらやりました。言葉を使わないアクティビティなどを学級担任と一緒にやることによって、子どもたちの関係作りができました。「地球子供教室」と「一般学級」を相互に、とにかく交流させながら、学校を変えていくという発想で進めました。

「国際理解教育」から 「国際交流教育」へ ひとつの試み

中津士識彦さん
(三重県伊勢市立
宮川中学校教諭)



ここ10年の間にブラジル人住民が急増した三重県の前任校で、生徒たちと一緒につくった生徒会活動の事例を発表。廃止された「国際教室」の空き部屋で、教科書やプリントの読み仮名ふりのボランティアからスタートし、生徒たちの自由な発想から部屋に活気が生まれ、ブラジル人生徒だけでなく、さまざまな生徒の居場所になっていった様子を説明した。



◆国際教室がなくなっていく過程があって、ブラジルから来た子どもたちが何もできない状況になってしまったのです。それで、やっぱり一番困っているのは、漢字の読み方が難しいというところで、教師だけでやっていては限界があるので、子どもたちに「国際ボランティア委員会」という形で呼びかけたのです。ブラジルから来た子どもたちが困っていますから、少し手助けしてくださいと募集をしたのですが、500人ぐらいの規模の中学校で、90人集まって来たので、ひとつの空き教室を活動場所にしました。

◆前の学校の反省から、ブラジルの子がいるからといって、そこをブラジルの事だけを理解する教室にはしたくなかったのです。というのは、国際理解教育という相手のことを学ぶというだけで、一方通行的なところがあります。ブラジルの子どもたちは、だんだん日本語が上手になっていくと、自分の「ブ

ラジル人である」というアイデンティティを捨てて、日本人になろうとする。「私は違うんだ、私はもう日本の方でしっかりやっていけるんだから、私と一緒にしないで」と。そういう子どもが何人かできてきて、そんな風にしなくなかったので、とにかく異文化というものと日本文化というものを、いっしょくたに交流できるような部屋にしたいと子どもたちに言いました。

◆「言葉の交流」が行われたんです。つばりの子、髪の毛が真茶々の子、いろんな子どもたちがいる学校なんですけども、その子どもたちも、学校に楽しそうな部屋があるっていうんで、どんどんやってくるわけです。その子たちの発想やエネルギーというのはすばらしいものがあって、その子どもたちに助けられたことが結構多くありました。漫画などを使って日本語を教えていて、「ああ、いい光景だな」と思っていたら、いつの間に

か逆をやっているんです。ブラジルの子のほうか、ポルトガル語を日本人生徒に教えているのです。今まであまり勉強が好きではない子どもたちにとっては、教えるというの

は快感なんです。今まで教えられてばかりですから。そして自分が教えたことを相手にわかってくれて、喜んでくれる。そうすると、またやりたくなって、どんどんやっていくん

です。今度は、じゃあ教えてばかりじゃ面白くないから、「じゃあ、お前んとこではなんて言うんや?」と言って、「俺んとこではこう言うんや」という感じになっていきました。

「国際理解」と「多文化共生」の間で ～「国際理解教室」講師の 体験から考えたこと～

キムスノク
金順玉さん
(横浜コリアン文化
研究会)



横浜市の「国際理解教室」の講師として10年間活動した経験を持つ金さんが、現場での実践を紹介しながら、自分が考える「国際理解教育」を提案した。

◆私が行ったその学校では、「差別などで問題を起こしていることは一切ないので、うちでは人権教育はいりません。とにかく、英語を使って楽しく国際性豊かな子どもを育てて欲しい」と頼まれたんです。教室には、韓国籍あるいは朝鮮籍の子が何人かおりました。私がキムという名前です。入るものですから、キム君という子の周りの友達が「この子も韓国人ですよ、先生」と教えてくれました。そうしたら、キム君は「ちがう!僕は日本人だ!」

って叫ぶんですね。自分が韓国人であることを隠したくなる環境の中に子どもがいるのに、うちは人権教育はいらないとおっしゃる。子どもを持つ母親としてショックでした。

◆子どもたちは、写真などで韓国の女性が片膝を立てて座る場面などを目にする「韓国のお母さん行儀わるいねえ」と言い出しますが、その時に「チョゴリを着て直接座ってみよう」という声かけをします。すると、日本みたいに正座をして座ると、せっかく綺麗な風合いのチョゴリが、くしゃくしゃになってしまう。どうやって座るんだろう。いろいろ工夫して「やっぱり、片方の膝を立てるのが、一番綺麗で合理的な座り方なんだ」と体験を通してわかる。「外国の人が我々と違う習慣を持っているのも、それなりの訳があって、それぞれ合理的に暮らしているんだ」とあるいは「文化というものには、優劣はないんだ」ということを子どもたちに気づいて欲しいとやってきました。

◆離任式の準備をしていると、「先生、いつ韓国に帰るの?」って言うんですね。外国人は日本に根を下ろして暮らすものではなくて帰るものだと思っている気がして、「日本

にはいろんな外国の人が住んでいるけども、在日と言われる日本で生まれて育った人たちもいれば、大人になって会社の仕事で来ている人もいれば、私のように日本人と結婚してここに死ぬまで暮らす人もいます」と話して、初めて「ああ、そうなんだ」とわかってくるわけです。ふと気がついてみれば自分のクラスに外国籍の友達がいっぱいいることにも気がつきます。

◆韓国には、羽根を足で蹴って遊ぶ「チエギチエギ」という遊びがあるんですが、それを取り出して遊んでいて、ふと気がつくとき椅子の女の子がいたんですね。「あっ、しまった」と。どうすればいいかわからなかったんですね。すると、「先生、この子は足は使えないけど、手は使えるんだ」「手でポンポンと叩くようにやったら」と子どもたちの方から教えてもらったこともあります。多文化共生というのは、外国と日本との問題だけではない。在日外国人と日本人の問題ばかりでもないし、異なっている全ての人間に必要な事だと私は最近思います。

国際理解から 「グローバル教育・ 多文化共生教育」へ

三ツ木純子さん
(川崎市教育委員会
人権・共生教育担当)



川崎市外国人市民の思いと協力を得て授業を作っていく民族文化講師ふれあい事業を紹介した。

◆(川崎市外国人教育基本方針の)基本的

な考えは、まず、国籍、民族等にかかわらず全ての子どもの学習権を保障することです。そして、マイノリティの文化を尊重して、併せて外国人市民の社会参加を支援する。もう一つは、日本人と外国人の相互の豊かさにつながる共生教育を目指すことです。

◆今、学校にいる外国籍の子ども、特にマイノリティの子ども、それから、二つの文化を合わせ持つダブルの子どもたちは生き生きと学校で生活できているのか?という問題があります。その子たちの持っている文化、日本の文化と違う文化をもっと尊重していく必要があるのではないかと。民族文化講師ふれあい事業は、さまざまな文化を持つ外国

人講師等に自分の文化を学校で子どもたちに伝えてもらう学習活動です。さまざまな文化に日本の子どもたちが出会うことで、日本の子どもたちの目も多文化共生へと開かれます。それ以上に、学級にいるマイノリティの子どもたちは、自分の文化を見直して自分に自信を持つことができます。川崎市在住の外国人市民は、現在111カ国の2万6千人を超えています。市では民族文化講師を募って、地域に住む外国の方、「川崎市外国人市民代表者会議」の委員やOBの方たちをお願いして、授業を先生と一緒に作っていただいています。多文化共生の意識が日常化していくことが大切だと思います。

感想

◆現場の実践例から、多くのことを学べた。南米出身の子どもにボランティアとして教えている私の悩みに対して、その解答の一端が伺えて、良かった。(学習補習教室ボランティア)

◆国際理解教育と多文化共生教育のインターフェイスが生み出す効用について十分理解することができた。国際理解教育から多文化共生教育へと自然に移行する

のは非常に難しく、教える場における少数派が負の側面を知り、多数派に対する敵意を抱かせる可能性をはらんでいる。そうではあっても、多数派にとって都合がよい教育内容は真の多文化共生教育にはつながらないと思う。(開発教育団体ボランティア)

◆多様性を尊重すると口では言っているが、いまだ同一化装置としての側面が強い学校は矛盾を抱えているが、できるところからやっていくしかないのだと思った。(高

校教員)

◆子どもを支えるものとして、学校、地域、ボランティア、保護者、そして行政がどのように連携していくべきかをもう少し深く知れたかった(学生)。

詳細はフォーラムの報告書(4月以降、無料配布の予定、郵送代別)をご覧ください。ご希望の方は、3月下旬に神奈川県国際交流協会へお問い合わせください。(TEL:045-896-2896 企画情報課)

「グローバル教育」 「多文化共生教育」に 関連する 教材・教具の展示会を 開催しました。

総合学習と関わりの深い
国際理解・環境・人権・情
報教育などの教材・教具
を多数展示しました。



英国から購入したばかりのグローバル教育の教材(NGOのBig Book、絵本、写真教材、キット教材など)も展示しました。3月末に情報フォーラム「教材コーナー」に海外教材を紹介するコーナーができます。



協会ではただいま、貸出教材「カリボックス」を開発中。2004年度から学校などへ貸し出す予定です。

13のNGO・NPOや出版社が出展し、団体で作成・発行している教材を展示、販売しました。教材の一部をご紹介します。

●地球の木「NEWマジカルバナナ」



私たちの「買う」「食べる」という行動が、世界のどんなところにどのような影響を与えているのか、身近な果物バナナを通して気づくための教材「マジカルバナナ」の改訂版。「クイズ」「カードゲーム」「写真」「ロールプレイ」「ふりかえり」「付録：バナナものがたり」から構成。補助教材として写真60数枚、クイズの解答用グラフ等、授業に使える素材がいっぱいのCDもあり。

◎価格：「マジカルバナナ」1冊1,500円 CD1枚1,000円

◎問合せ：地球の木 TEL:045-228-1575

<http://homepage1.nifty.com/EarthTree/>

※講師派遣も可能

●ネパリバザー「ロクタ紙づくりキット」



手漉き紙の原材料であるロクタ(沈丁花の一種)はネパールからのフェアトレード商品。紙漉体験をしながら、生産者の生活や紙づくりの様子も学ぶことができる。木枠と紙のキューブ1ヶ付き。10枚以上の紙が漉ける。

◎価格：700円(1キット) ◎問合せ：ネパリバザー TEL:045-891-9939

<http://www.yk.rim.or.jp/ngo/indexj.htm>

●アムネスティ ビデオ「未来をください」～戦火の中の子どもたち～



親や家を、時には国を失い、教育の機会さえも奪われた子どもたちは、パレスチナで、アフガニスタンで、チェチェン、チベットで今何を考え、何を求めているのか?同世代の子どもたちも一緒に自分に何ができるのかを考えるためのビデオ。28分 ナレーション：山田まりや

◎価格：3,000円

◎問合せ：(社)アムネスティ・インターナショナル日本 TEL:03-3518-6777

<http://www.amnesty.or.jp>

●開発教育協会 「世界がもし100人の村だったら」



ベストセラーになった『世界がもし100人の村だったら』(マガジンハウス刊)の情報を活用して行ったワークショップをもとにした開発教育の参加型学習教材。第1部のシミュレーションは、人口、性別、年齢、地域、言語、富の分配の7つのテーマから構成され、世界の格差と多様

性をわかりやすく体感できる。すぐに使えるワークシートつき。

◎価格：1,200円

◎問合せ：開発教育協会 TEL:03-5844-3630

<http://www.dear.or.jp/>

※講師派遣も可能

●ピナット「フィリピン・ボックス」「フィリピン竹の楽器ボックス」



フィリピンの民族衣装や生活用品、楽器などのモノ、写真のほか、授業案や実践事例も満載のフィリピンボックス。学校にフィリピンのお母さんたちが講師で招かれるときにも使われている。竹の楽器ボックス

はアジアの楽器や竹の楽器の学習用に。

◎貸出料：両ボックスともに、3,000円(送料は利用者負担)

◎貸出期間：2週間まで。

◎問合せ：ピナツボ復興むさしのネット TEL:0422-34-5498

<http://hachinoko.infoseek.livedoor.net/pinat.htm>

●開発教育 を考える会「地球の仲間たち」



いろいろな国の子どもたちの「普段の生活」を紹介するフォトランゲージ教材「地球の仲間たち」(世界25ヶ国)。CD-ROM版では、世界19カ国20人の子どもたちの生活やものの考え方などを500枚を超える写真と解説文で紹介。対象者が多

いときにスクリーンに映してフォトランゲージができる。

◎価格：1セット800円、テキスト別売500円

CD-ROM5,700円(シングルライセンス)

◎問合せ 開発教育を考える会

E-mail: chikyu@group.email.ne.jp

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~chikyu/>

●ほかの出展団体

◎新しい環境学習をつくるネットワーク：環境学習教材を作成

◎T-GAL：国際理解プログラムの出前授業実施ほか

◎国際理解教育センター(ERIC)：グローバル教育の多様な教材の販売、講師の派遣

◎JICA横浜：国際協力出前講座の実施ほか

◎(株)太田次郎社 ◎(株)明石書店

このページで紹介した教材等は、あーすばらざ2階情報フォーラム「教材コーナー」で閲覧できます。

話してみなけりゃ、はじまらない! あーすフェスタかながわ2004 開催のご案内

「みんなで育てる多文化共生」をテーマに、神奈川に住む、さまざまな国籍、文化、歴史的背景を持つ多くの人々が集い、出会い、語り合う催し、あーすフェスタかながわ2004が開催されます。今年のフェスタの合い言葉は「話してみなけりゃ、はじまらない!!」。ステージや屋台など、それぞれの会場で、さまざまな出会いと対話が生まれることを願い、企画内容にも工夫を凝らしています。

お友達と、また、家族みんなで楽しめる2日間! ぜひ、ご参加ください。



写真:あーすフェスタかながわ2003の様子。伝統芸能ステージ(左)世界屋台村(中)世界の料理教室(右)

- 日程:2004年5月15日(土)・16日(日)
- 会場:あーす 355 及びリリス(横浜市栄区民文化センター)
- 内容(予定):民族芸能ステージ、日本語スピーチ・フォーラム、団体紹介(展示)、民族舞踊・楽器教室、「しゃべり場」(若者達による自由な意見交換の場)、屋台村など
- 入場無料(料理教室等、一部のプログラムは参加費が必要になります)
- 主催:あーすフェスタかながわ2004実行委員会
- 問合せ:あーすフェスタ実行委員会事務局(神奈川県国際交流協会)※月曜休み
TEL:045-896-2964
<http://www.k-i-a.or.jp/earthfesta2004>

2004年度春期英会話講座開講のお知らせ

神奈川県国際交流協会では、2004年度春期英会話講座の受講者を募集しています。たくさんの方のご参加をお待ちしております。

- 内容:「基礎」「初級」「中級」「上級」の4つのレベルにクラス分けし、それぞれのレベルに即したコミュニケーション能力を高める講座を行います。毎回、講師が用意するテーマ、教材をもとに「聞く力」と「話す力」の向上を目指します。また、講師の母国文化の紹介など国際理解の要素を盛り込んだ講座です。
- 開催時期:2004年4月6日～2004年8月7日(各クラス毎週1回、全18回)
- クラス

	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
10:30～12:00	基礎		初級		
13:30～15:00		初級	中級		上級/中級(15:30～17:00)
18:30～20:00	中級	中級/初級	上級	初級	

上級クラス:応用英会話を身につけることを目指す方のクラス

中級クラス:日常英会話をマスターすることを目指す方のクラス

初級クラス:日常英会話の基本を身につけることを目指す方のクラス

基礎クラス:日本人講師に英語の基礎を学びたい方のクラス

●場所:あーす 355 1階研修室A、B

●対象:16歳以上

●定員:各クラス12名程度(最少実施人数8名)

●講師:ビル・ロナガン、ジョエル・ラッシュ、エリザベス・ナイト、清水弥生 他

●申込方法:電話または窓口で先着順にて承っています。新規受講者の方はレベルチェックが必要になります。詳しくは担当までお気軽にお問い合わせください。

●費用:受講料39,900円(消費税込み)、協会年会費3,000円、教材費実費

※受講料納入後は、いかなる理由であっても返金いたしかねますので、予めご了承ください。会員期限が4月以降まで有効の方は協会年会費は不要です。

●問合せ・申込み:国際協力課(担当:水野)※月曜休み

TEL:045-896-2964 FAX:045-896-2945 E-mail:minsai@k-i-a.or.jp

真荷舟[MANIFUNE] 地球市民コンサート2004 Be Here Now

音楽を通じて環境保護と平和のメッセージを発信してきた音楽ユニット「真荷舟」が、「地球市民」をテーマに、ワールドミュージックを披露します。

●日時:2004年3月27日(土)

19:00開場 19:30開演 21:00終演予定

●場所:あーす 355 2階プラザホール

●入場料:2,000円(神奈川県国際交流協会会員1,500円)※要電話予約

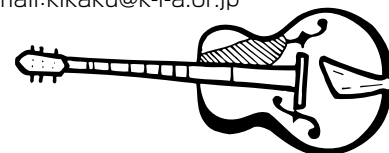
●出演:「真荷舟」(榎田竜路(vo,eleGt,acoGt)、阿部拓也(drs.)、西山克幸(Chapman Stick)

●同時開催:当日は、NPOによる「地球市民グッズ」販売もあります。(地球の木、ネパリ・バザー、ナマケモノ倶楽部)

●問合せ・申込み:企画情報課※月曜休み

TEL:045-896-2896

E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp



春休み こども地球市民クラブ2004 「わくわくりズム コミュニケーション」

様々な打楽器やおもしろ楽器、声や手拍子など思い思いの表現を使って、自由にわくわくりズム・アンサンブルを楽しむワークショップです。ことばがなくても心が通いあう「ノンバーバル・コミュニケーション」を体感してみませんか?

●日時:2004年3月26日(金)・27日(土)

13:00～16:00(2日間連続)

●場所:あーす 355 3階企画展示室他

●内容:ヤギの皮をはったアフリカの太鼓など様々な民族楽器によるリズムアンサンブル、おもしろリサイクル楽器の製作、音楽何でも質問コーナーなど。詳細はお問い合わせください。

●対象:小学生～高校生、親子参加も可能
外国籍の方の参加大歓迎

●定員:40名程度(事前申し込み)

●参加費:材料費300円程度

●講師:鈴木キヨシさん(生活音楽研究所「おんらくラボ」ディレクター) 他

●問合せ・申込先:地球市民学習課

※月曜休み

TEL:045-896-2899・2898

FAX:045-896-2945

E-mail:kakeshin@k-i-a.or.jp

エスニックレストラン新規提携店紹介 インド料理「ティーサイド」

バングラデシュ出身のシャオンさんのお店。インドのカレーが40種類あり、ベンガル地方、マドラス地方、ネパール地方出身のスタッフが、それぞれの故郷の味を披露します。お薦めは、ミート、ベジタブル、フィッシュの3種類のタリーセット。スパイシーなごまのソースで食べる、モモというネパール料理や夏限定メニュー



内装が工夫された店内



ミートタリーセット(右)とモモ



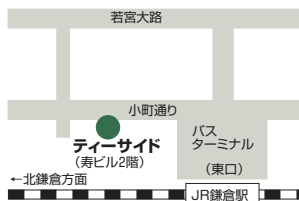
インドの紙でできた照明

のサンバルライス(豆と野菜のリゾット)など珍しいメニューもあります。

シャオンさんは、売上の一部を故郷の高校生への奨学金として寄付しています。

●**会員特典:**
チャイ(インドのミルクティー)をサービス(ランチタイム除く)

JR「鎌倉駅」より徒歩5分
鎌倉市小町1-6-12 寿ビル2F
TEL:0467-24-9572
営業時間●11:00~21:30(ラストオーダー)
定休日●無し
URL●<http://www.t-sideonline.com>



●**神奈川県国際交流協会(KIA)**は—地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人とのつながりを大切にした「国際交流」「国際協力」を推進するさまざまな事業を展開しています。

●**あなたも会員になりませんか?**

★**学生会員制度もスタート!**

協会の活動を支える会員を募集しています。会員になると

- ①協会が主催する各種催しや国際交流団体、NGOの催し情報、ボランティア情報を掲載した『HelloFriends』『サラダボウル』をお送りします。
- ②当協会の出版物の割引サービスが受けられます。
- ③会員の方を対象にした催しへご招待します。
- ④『エスニック・レストラン・マップ』をお送りします。
- ⑤会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。
- ⑥ **あーぢ 355** のレストラン「メルヘン」でお食事の場合、会員証の提示で、コーヒー、紅茶、グラスワイン、ソフトドリンクの一品サービスが受けられます。
- ⑦ **あーぢ 355** ショップ「ベルダ」で2,100円以上(税込み)購入の場合、会員証の提示で10%割引が受けられます。

年会費: 一般	3,000円から
学 生	1,500円から
団 体	10,000円から

*会員登録をご希望の方は、協会までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

★当協会は、2003年4月より、**あーぢ 355** の施設運営を含めた全事業を神奈川県から受託しました。



このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。

かながわ民際協力基金助成申請受付のご案内

神奈川県国際交流協会では、4月1日から5月31日までの間、「かながわ民際協力基金」への助成申請を受け付けます。申請についてのご相談も受け付けています。

【1】春の助成申請募集(下記①~⑤のいずれかに該当する活動)

●**対象分野:**①海外の開発途上地域での協力活動 ②外国籍県民等を対象とした、県内での協力活動 ③国際協力の担い手を育成する活動 ④NGOの組織強化や活動の充実を図るための活動 ⑤NGOと神奈川県国際交流協会が協働で行う活動

●**申請資格:**県内に活動拠点があるか、主に県内で活動するNGO

●**助成上限:**①~③300万円 ④50万円 ⑤100万円

(いずれも、助成対象経費から他の公的助成金の額を引いた金額の1/2が上限)

●**対象:**今年10月1日以降、1年の間に開始

される事業(緊急支援事業の申請は随時)

※『申請の手引き』を配布しています。ホームページでも見ることができます。

【2】申請ガイダンスの開催

●**日時:**2004年4月11日(日)13:00~15:00

●**場所:**あーぢ 355 1階研修室A

●**内容:**「かながわ民際協力基金」の制度、審査ポイントについて説明、個別相談等

●**問合せ:**国際協力課※月曜休み

TEL:045-896-2964

FAX:045-896-2945

E-mail:minsai@k-i-a.or.jp

■基金の助成を受け、現在ルワンダ(アフリカ)で活動するNGO「ムリンディジャバン・ワンワブ・プロジェクト」代表の吉田真美さんが、3月30日(火)21:15から放映されるNHK「プロジェクトX」に登場する予定です。ぜひご覧ください。

Hello friends

2004年3月1日発行
第237号

発行/財団法人 神奈川県国際交流協会
〒247-0007
横浜市栄区小菅ケ谷一丁目2番1号
神奈川県立地球市民かながわプラザ1階
☎045-896-2626 FAX.045-896-2945
URL: <http://www.k-i-a.or.jp>
E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp
印刷/吾妻印刷株式会社

(企画情報課 山内 涼子)

ければと思っ。

■「子どもは世界中どこにいても基礎教育を受けられる権利がある。ブラジルの友人も教育を受けられるように力をかけてほしい、どの国の人たちとも分け隔てなくつきあっている国際人として成長する機会にしたい」と生徒に呼びかけたそう。結果として活動は子どもたち同士の間で交流などにつながっていき、学校に居場所がなかった「日本人」の子どもたちも集う共同の学びの場が生まれた。

■子どもたちが「教え」「教えられる」ことを通じて、相互に「学び」を楽しんでいたのは、そこに相手がいなくてもいいという真の心で心を揺らしたものがあふれていた。中津さんには「学びたい」という欲求が呼び起す。中津さんは「国際理解教育から国際交流教育へ」と言っているが、その実践を聞いて、「国際交流」という言葉の持つ本来の意味を再認識した。

■中津さんは、その生徒会活動や年度途中の計画もあいまない見切り発車だったと謙遜していたが、あちこちの学校で、そうした柔軟な試みを増やしている。

■「子どもは世界中どこにいても基礎教育を受けられる権利がある。ブラジルの友人も教育を受けられるように力をかけてほしい、どの国の人たちとも分け隔てなくつきあっている国際人として成長する機会にしたい」と生徒に呼びかけたそう。結果として活動は子どもたち同士の間で交流などにつながっていき、学校に居場所がなかった「日本人」の子どもたちも集う共同の学びの場が生まれた。

■子どもたちが「教え」「教えられる」ことを通じて、相互に「学び」を楽しんでいたのは、そこに相手がいなくてもいいという真の心で心を揺らしたものがあふれていた。中津さんには「学びたい」という欲求が呼び起す。中津さんは「国際理解教育から国際交流教育へ」と言っているが、その実践を聞いて、「国際交流」という言葉の持つ本来の意味を再認識した。

■中津さんは、その生徒会活動や年度途中の計画もあいまない見切り発車だったと謙遜していたが、あちこちの学校で、そうした柔軟な試みを増やしている。

キャラバン・サライ

※キャラバン・サライとは、かつてシルクロードにあった隊商宿。文化・情報の中継点となっていました。協会職員からのメッセージ発信の場となるよう名付けました。